

## 只野 武先生を偲ぶ

日本未病学会北海道支部の設立およびその活動にご尽力いただいた金沢大医学部特任教授の只野武先生が2023年5月19日に金沢の自宅で急逝されました。先生のこれまでの北海道における貢献に心から感謝申し上げるとともにご冥福をお祈りいたします。

先生と私どもとの出会いは、2010年の秋に、日本未病学会（当時は「日本未病システム学会」）の北海道支部を設立したいと私の職場に訪問されたところから始まりました。元々の専門分野が薬理学である只野先生が、薬物療法を開始する前のいわゆる「未病」の状態をコントロールすることの重要性を熱く語っておられたのが印象的でした。

只野先生は、北海道支部を設立するにあたって、初めから薬剤師と栄養士のコラボレーションを想定して組織作りに奔走され、未病学会の各地方支部の中でもユニークな活動組織を作り上げました。このことは、今になってみると地域医療や地域の健康管理を考える「未病」においては、極めて的確な多職種連携の開始点をにらんでのコラボではなかったかと思われ、只野先生の先見の明には感嘆を禁じえません。事実、未病の状態は、実際の医療に進行する前の状態であり、そこには、当該患者（になってしまうかもしれない健常人）を取りまく栄養摂取状態や居宅の衛生状況が大きな要点であるため、そこに関与できる医療関係・生活支援職として、栄養士、薬剤師、介護士、ケアマネージャー、ヘルパー等々が共通した目標に向かって協働することは、その後の「地域包括ケア」を潤沢に進めていくうえで、大事な起点となります。

そのような観点から、私共は只野先生の指導の下、2011年秋には第1回未病システム学会北海道支部大会（札幌）で開催するに至りました。基調講演には、野々村瑞穂先生（所属：株式会社日本食生活指導センター）に、「未病における食事のありかた」という演題で講演していただきました。シンポジウムは、「未病の時代に適した脂質酸化の新しい評価系の開発」「ハトムギ機能性食品の研究開発」「スポーツと未病と栄養」「未病と機能性食品：その開発と適正使用について」の4テーマ、一般演題も11演題が寄せられ、盛会のうちに終了することができました。

その後、先生は、金沢大学医学部の客員教授（臨床研究開発補完代替医療学）として赴任され、活動の本拠地を金沢に移されましたが、札幌に北海道支部大会



組織委員会の度に来札され、私共を指導・助言してくださいました。以来、支部大会は毎年開催され、コロナ禍の際でも ZOOM によるリモート開催をするなどして、今回第 12 回を迎えます。

その間 2016 年には、高級緑茶に含まれ、神経細胞の新生を促すことが報告されているアミノ酸「テアニン」と人の腸内免疫力を活性化する「乳酸菌」を組み合わせた独自の食用フィルムシートを開発



し、認知症予防への効果が期待できる治験結果を報告しています。さらに 2021 年にはスタートアップビジネスコンテストいしかわ 2021 に於いて最優秀起業家賞を受賞され、認知症の予防や改善に効果が期待されるサプリメント「まるちペーすと」の開発への取り組みが高評価されました。

只野先生は、スポーツもよくやられ、特に近年では、冬には北海道朝里スキー場近くに別荘を構えて、スキーを楽しまれるなどされていると聞いていましたので、この度の急逝には、北海道支部の会員誰もが信じられない気持ちです。まだまだお元気で私共を導いていただきたかったというのが誰もが感じている気持ではないかと推察いたします。先生は、未病学会北海道支部を立ち上げる以前は、東北薬科大学（現東北医科薬科大学）で長らく教員として勤務されており、



その当時の後輩、教え子が北海道を始め多くの地域の病院薬剤部長、調剤薬局長、薬局経営者、大学薬学部教員が活躍しています。そのため、支部の活動においてもかつての恩師を慕って多くの薬剤師が参加してくれていました。さら

に、北海道支部の特徴でもある栄養学・栄養士の方々とのコラボについても、適切な人材配置をして、極めて円滑な支部活動を現在でも継続することができています。

加えて、学会という学術団体であることから、薬剤師、栄養士という職能だけではなく北海道情報大学をはじめとする純粋な研究者の参加も同時に推し進め、単なる「医療従事者の実務提携」にとどまらない学会活動の推進も実践され、本支部大会においても、自らの研究成果を講演してくださいました。

先生がなくなられた後、北海道支部の活動も若干活動の規模やレベルが停滞した時期もありましたが、先生の生前の意思・志を引き継ぐ形で継続しています。

いうまでもなく、「未病」の問題は、今後の地域医療を上手く軌道に乗せるうえで、避けては通れない数々の課題を含んでいると思われ、その部分に関わっている栄養士、薬剤師が大学・企業などの開発研究機関と臨床現場業務の「橋渡し」的な役割を担当することは、これからますます顕在化する「高齢者医療」「少子化問題」に一定の光明を与える可能性が高いといえます。

ここに、只野先生の東北薬科大時代から引き続いた北海道におけるご功績に衷心より感謝申し上げますと共に安らかにお休みくださいますようご冥福をお祈りいたします。









(2024年9月 日本未病学会北海道支部長 井関 健)